

田村実造 著

中国征服王朝の研究 上

島田正郎

本書は、著書が戦前戦後を通じ、『満蒙史論叢』『蒙古学』『東洋史研究』『史林』『大谷学報』『考古学雑誌』『羽田論叢』などに発表された遼代史に関する論稿に補訂を加え、体系的に編輯した論文集である。著者のいわれる征服王朝とは遼・金・元の三朝を指すが、金・元に関する論文および三朝の文化に関する論文は、下巻に予定されているということである。

遼国ならびに、この国を建てた契丹民族に関する研究が、著者によって一つの転機を形成されたことは、ここにいまでもないが、しかし主要な問題だけでもまだまだ未解決のことが多く、従ってこれからこの種の問題に取り組もうとする者にとって、かかる著者の主要な論文が一冊の書物にまとめられたことは、きわめて有意義なことといわなければならない。ことに本書の論文の大部分は、主として昭和一〇年代から二〇年代はじめに書かれたものであるから、本書を成すに至る補訂加筆の段階で、それからこの著者の研究、なかんずく「遼・金・元朝を一体的に攷究す

べきである」という著者の考え、とりわけこの時期以後に進められた著者の金・元二朝あるいは明代以降の蒙古の個別的な問題の研究の蓄積が、どのように反映されているか、ないし遼代史に限ってこの時期以後の内外の学者の研究に対し、著者がどういう考えを持っておられるかが、最も関心を持たれるところであろうと考えられる。本書は四五〇頁に及ぶ大冊であるし、筆者もまた著者の驥尾に附して同種の問題に興味をあつめてきた一人であるから、以上の点にしぼって本書の紹介を試みることにしたい。

第二章「北アジアにおける歴史世界の形成と発展」は、本書全体の総説ともいべきものである。著者は、北アジアに先史時代から独自の文化圏が形成されていたとし、これを基盤に前三世紀ごろから次々に興亡した遊牧民族による国家を、遊牧国家と征服王朝との二つの類型に分け、それぞれの歴史的性格に検討を加え、前者から後者への発展を、一〇世紀の遼朝の成立に求め、その事由として隋・唐勢力の拡充による北アジア諸民族への刺戟、および契丹民族の遊牧圏の地理的位置を挙げておられる。つまり著者は、牧畜・農耕の両社会を包含し、前者が後者に対し政治的・軍事的に優位に立つことをもって、征服王朝の基本的性格であるとされながら、それがどの遊牧民族にも本来的に具有された素質である点を重視し、征服王朝となったけれども、交界地帯の出身であることを強調しておられる。従って著者の関心は当然に、こういう遊牧民族に接触した漢人、ないしは征服王朝を形成するに至る過程での、および征服王朝においての漢人の役割に集中され、

以下の諸論文もおおむねそこに重点がおかれている。

第二章「遼朝建国前のキタイ族」は、この部族の始祖説話を手がかりとし、かれらが中国の唐代に、その中の八部族が中心となつて連合体組織を形成するに至つた事情を主題とし、第三章「遼朝の成立」で、十世紀の初め耶律阿保機（太祖）が出て全部族を統合して樹立した『遊牧政權』が、どのような経過を辿つて『征服王朝』に発展したかを扱っている。著者は、阿保機統一の原動力の一つとして、漢人の政治的知力と経済的能力とを挙げ、阿保機が漢人農民を領内に徙し、かれらの生産力を基盤にして、しだいにその権力を強めていったとして、漢人の果たした役割を克明に検討しておられる。

契丹民族の政權が『征服王朝』に発展する過程での右の漢人の果たした役割に対する評価は、著者の遼代史研究における軸心になつているものと考えられるが、著者は、第四章「遼朝をめぐる国際関係」、および第五章「遼・宋の交通と遼国の経済的発達」の両章で、とくに遼・宋間の澶淵の盟約と、その成立以後における両者の友好的関係、とりわけ两国間の国際交通路の開拓と、文化・経済の交流の活潑化、およびそれにともなつて急速に発達した遼国内の経済的事象、なかならずその面での漢人の活躍の模様を明らかにされ、よつてもつて自己の評価に対する積極的な裏付としようとしておられる。

そしてそのうえで右のような漢人の経済的活躍に支えられた『征服王朝』の社会の実態に究明を加えられたのが、第六章「遼朝の社会に関する研究」である。著者は、この章の第一節「徙民政策と州県制の成立」で、遼朝治下活躍した漢人がどのようにし

て領内に入ったかを、阿保機以来の強制移民（徙民）と自主的投降による集団植民に基づくとし、遼朝はこれらに契丹民族に対するとは別個の支配を行なつたとして、遼朝治下における州県制成立の経過を詳細に論じ、さらにそれによつて政治上・経済上・社会上・軍事上の二元的形態の特色が生じたとしておられる。著者自身が序にいつておられるように、この課題こそは著者の遼代史研究に転機を与えたところのものであり、これによつて津田左右吉博士の「遼の制度の二重体系」（『濶鮮報告』第五）に示された制度上の二元制を創始させた社会の実態を究めようとなされるとともに、徙民政策の問題は、遼朝の社会だけでなく、ひろく中国征服王朝はもとより、これに先行する北朝諸王権治下の社会を究明する鍵であるとしておられる。著者はさらに第二節「都市の成立と性格」で、さきの州県の特化したものが当代の都市であるとし、五つの都市の成立と性格を個別に論じ、また第三節「遼代仏教の社会的考察」において、都市や州県と寺院との関係ならびに寺院と施主との関係などをとりあげ、断片的史料で仏教ないし仏寺と社会や庶民との結びつき、あるいは仏教の経済的基礎を可能な限り明らかならしめようとしておられる。

以上の諸章が、おおむね漢人を主体とする遼朝治下の農耕民に關しての論述であるのに対し、第七章「キタイ族の社会生活」は、遼朝を建てその治者となつた遊牧の契丹民族のことを扱っている。第一節「遼朝の部族制」は、この書のために新たに書かれた唯一の部分であるが、これまで著者が概説書なり啓蒙書なりに示されたところを敷衍するのにとどまつており、第二節「キタイ族の生活様式」、第三節「キタイ族の頭髪と服飾」とは、慶陵の壁画な

どを用いて契丹民族の衣食住などを引き出そうとされたものである。

三

以上が本書各章のあらましである。筆者は本書を紹介するにあたって、二つの視点からこれを試みたいと述べた。第一点つまり「遼・金・元を一体的に攷究すべきである」という著者の立場と、それに基づいて本書に盛られた研究のなされたち著者が試みた一連の研究とが、本書にどのように反映されているかの点からすると、上・下二巻よりなる本書の構成そのもの、つまり中国史上の征服王朝における漢人の演じた役割に対する著者の評価が、本書構成の軸心となっており、綿密精緻な考証によって見事にそれが裏付けられている。率直に言って、かつて著者が学術誌上に公表された論文は、かなり難解なものであったが、本書はきわめて平易な表現と周到な配慮とによって、著者の遼代史研究に関する専論のすべてを体系化することに成功しておられる。著者が序において「私自身の停年もしだいに近づいたので、これまでの研究をまとめておきたい」といわれた意図が、御自身の手によって実現され、われわれ後学にお示しくださったことに、謹んでお喜びとお礼を申しあげたい。しかし第二の点、つまり爾後の二〇年間に内外の学者がとげた遼代史研究の成果が、本書を成すに至る旧稿の補訂加筆の段階で、どのように扱われているかの問題は、ことに著者が当代における遼代史研究の先頭に立たれる碩学であられるだけに、筆者の最も期待するところであった。この二〇年の間には、ウィットフォゲル博士の著書をはじめ、主要なものだ

けでも五指にあまり、それらの公刊されるごとに、著者の周到な批評紹介のあったことを承知していたからである。そのうえ、そのなかには例えば姚從吾氏の漢城についての研究、蔣復綏氏の遼淵の盟についての研究などのように、著者の扱われた専題と同じことがらを主題としながら、見解を異にするものもあり、また一方には陳述氏の『遼文匯』や「契丹社会経済史稿」のように、とくに本書第六章第三節の所論を補足するような新史料を盛ったものもあり、ことに後者に関連しては、中国大陸から発見された当代の金石文のような新史料も多数あるにおいておやである。補訂加筆が、旧稿の体系化だけにとどまったのは、惜しみてもあまりあることといわなければならないが、幸いに著者は元氣愈々旺盛、研究に後進の指導に、はたまた辺地の実地調査に活躍されるなど、壯者をしのぐものがあると承わっている筆者としては、これらのことからについての高見をお示しいただいて、われわれ後学を鞭達たまわらんことをお願いしてやまない。

四

筆者は、著者が本書に盛られた研究を逐次学術誌上に公表されつつあったころ、学窓を出た。つまり遼代史研究に関しては、時期的にずれている。この時間のうえのずれは、また対象のうえでもずれている。著者が、主として遼朝治下の漢人を主体とする農耕民を対象として、政治・経済に重点を置いて研究を進められたのに対し、筆者は主として契丹人を主体とする遊牧民を対象として、法律・制度に重点を置いて研究を進めて来た。筆者は、著者をこの道の先学として尊敬し、上洛のたびに門をたたいて教えを

乞うたのであるが、一方においては、あとから道を進むものとして、筆者には著者が比較的手がけられることの少ない面に力を傾け、よってもって当代史の諸問題の解明に資そうとする明瞭な意図を抱いてもいた。昭和十七年、筆者が当時の満洲国政府の囑により遼代遺蹟の考古学的調査の主査に任じ、いずれの種類に遺蹟から着手するかも自由裁量にまかされたとき、城址・聚落址・陶器などの製作場址を積極的に選択したのも、すでに著者が慶陵の調査を完了され、当代の墳墓の典型を示されていたのちであったから、筆者としては以上のような種類の遺蹟の典型を明らかにしたいと望んだ故である。蟻螂の斧をふるうが如き当時の筆者のふるまいも、血気さかんなころにありがちなところとして、重厚な著者の有恕が得られているものと思う。後日、著者がこの種の問題を一層基本的に解明されようとして、金・元あるいは明代の蒙古に関心を移して進まれるようになると、筆者もまた著者とは異った立場から、モンゴリアの遊牧民の法的慣習に注意を向けるようになったから、つねに同じ土俵にありながら、とうとう正面から議論をたたかわせることもなく今日に及んだ。こうして著者は、先年その長い研究の蓄積に基づいて、本書の第一章に盛り込まれたような所論を示され、遼朝をもって中国史上の『征服王朝』と看做す見解を示された。筆者は、いまだ個別の問題の研究に追われている段階で、この種のことからについてはっきりした見解を打ち出すまでに至っていないが、それでも遼朝を中国史上の征服王朝といきってしまうことには、少なくとも懐疑的ならざるを得ない。それは著者と筆者とが、二元的な形態を遼朝の特色として把握しながら、その理解の仕方にも若干のくいちがいがあ

であり、しいていえばそれぞれの対象とした主題に相違があったからでもあろう。筆者は、『耶律政權』から『征服王朝』への発展の過程で漢人の果たした役割、ならびに、『征服王朝』成立後の遼朝において漢人の政治的とくに経済的活躍に関しての著者の所論に、十分納得させられておりながら、しかもなおどのようにして漢人を集中しこれを利用してような政治勢力が発生し、それが『耶律政權』に成長し『征服王朝』に発展したかの問題について、著者の論述だけではまだ承服することができず、ことに著者が中国化の度合いが著しくなるとされる聖宗朝以後において、かえって法律や制度の面で遊現現象のあらわれていると認められる事実、ならびに個々の征服王朝の性格についての所論、なかななくいわゆる遊牧国家型から征服王朝型への発展、および遼朝と金・元・清三朝の性格の比較などに関して、筆者にはなお著者の所論に納得できない点が少ない。

これらに要するに、著者が北アジアに東アジアとは異なる文化圏の存在を認められながら、それを基盤として成立した政治権力について、その構造そのものについての見解を十分に示されなかったところから来ているものと考えられる。遼代史研究が著者によって一転機を形成されたことは、くりかえし述べるまでもないが、しかし未解決の問題がまだまだたくさんあることも認めなければならぬ。筆者も、著者の驥尾に付してなお執拗にこの種の問題に取り組んで行くが、またたきさんの研究者の現われてくることも、半生の研究成果を体系的にまとめて学界に送られた著者のおそらくは望んでやまられないところであらうと考える。遼代史研究は史料の不備なこともあって困難ではあるが、しかし

なんといつても、北アジアに生成した政治権力の形に一つの転機を画した時期でもあるのだから、その性格を徹底的に究めることが、北アジア史の闡明には不可欠のことからなのである。いまこの種の問題に多くのすぐれた研究をとげられた著者の業績が、御自身の手によって集大成され世に送られたことは、ちかごろ漸く盛んとなった北アジア史研究に裨益するところ大なるものがあるといえよう。

(東洋史研究双刊一二之一) A5版 本文四四四頁 英文摘要六頁

図版四 昭和三九年九月 東洋史研究会刊 定価二二〇〇円)

(明治大学教授)

稲葉正就
佐藤長共訳

フウラン・テプテル HU LAN DEB THER

——チベット年代記——

金子良太

佐藤・稲葉両教授の御勞苦による「旧赤冊」邦訳註の上梓をみたことは、日本西蔵学の水準が世界のチベット史学者のそれと比肩することを意味するものとして、我々チベット学の末席に連なる者にとつても共に欣びとするところである。

従来も「赤冊」の重要性については、学界の関心が集められていたが、特に G. N. Roerich 教授が一九四九年に「青冊」の英訳を出版され、その序論 (p. VI) において「赤冊」の概観に言及されてから、一層の関心を引き、G. Tucci 教授はその入手のため、あらゆる方面を探索し、「新赤冊」を発見したときには、誤つてこれを「旧テプマル」と思い、欣びの余り身震いを覚えたとすら述べておられる(東方学第十二輯〈西蔵の歴史文獻〉)。

「赤冊」即ち Deb-ther dmar-po、通称 Deb-dmar は、別に Hu-lan deb-ther と呼ばれる chos-hbyun で、チベットで最古とされる原初型の編年記の一つであり、ツァル・グンタン Tshal-gun-than の座主クンガー・ドルジ・Kun-dgañ rdo-rije の一三四六年の著になるものである。

「赤冊」原本および流布本探索の過程において、巻間に「旧マ